

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

伝統染織とは何か：

伝統と革新、そして継承＜共同研究＞：

伝統染織品の生産と消費：

文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって＞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2020-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中谷, 文美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009491

伝統染織とは何か

—伝統と革新、そして継承

文・写真 中谷 文美

布生産にみられる伝統と革新

布は、さまざまに私たちの生活と結びついてきた。日常着から祭礼用の晴れ着にいたるまで、衣服として身を飾るばかりでなく、儀礼用の装飾として、あるいは供物の一部として用いられたり、あるいは絨毯や壁掛けなどの調度品として住まいを彩ったりもする。ローカルな文脈において、特定の布の素材・意匠とそのまとい方は、民族集団、宗教、性別、地位などの徴となり、集団・個人間の差異を確認・誇示するような働きを持つことが多い。同時に、布は工芸品のなかでも比較的軽く、しなやかで持ち運びしやすいため、古くから重要な交易品として広域を移動してきた。中国や東南アジア、インドなどから日本に持ち込まれ、茶道において珍重された名物製めいぶつぎせ、あるいはインドから東南アジアに渡って威信財となり、現地の布の意匠にも大きな影響を与えたパトラのように、移動した先で新たな価値を帯びることもあれば、デザインや技法が布と共に別の社会に広まっていくことも珍しくない。

私たちの共同研究が対象とする「伝統染織品」は、ローカルな生活世界において一定の社会的・文化的意味と機能を持ち、使用されてきた布製品を指す。だが、そこに含まれる「伝統」とは、過去から現在まで変わらずに受け継がれてきたという意味ではない。こうした染織品の製作過程は、多くの場合「手仕事」の範疇に入るため、昔から同じ技法で作られてきたかのようにとらえられがちである。しかし、布の生産とその消費は、素材、技法、意匠、そして用途のいずれ



ブータンで自家栽培の綿を紡ぐ女性。紡いだ糸を天然染料で染め、布に織りあげるところまで1人でこなしている。その布は、伝統的衣装の着用を義務付けられている公務員が遠くから買いに来るといふ (2014年、ペマガツェル県)。

をとっても、歴史的時間のなかでつねに変化にさらされてきた。今や、純粋に自家消費のためだけの布を作り続けている地域はほとんどないだろう。他方、産業としての布生産に従事している地域では、さまざまな次元での革新を取り入れてきたからこそ、伝統的とされる技術の継承が可能になったといえる。

研究のキーワードは「文化遺産」と「観光」

前述のように特定の集団のアイデンティティなどと結びつく日常着や晴れ着であった布が商品化され、従来の生産と使用の文脈を離れた市場に流通するようになった過程は、世界のいたるところでみられる。それ自体は目新しい事実ではないものの、情報技術の発達や人・モノの移動のスピードの加速、さらに世界中で進む洋装化などを背景に、布の生産者と消費者を取り巻く状況にはこれまで以上の大きな変化が生じているように見える。共同研究では、さまざまな事例の比較を通じて、現在進行形で伝統染織の生産と消費の現場で起きている変化の実態を重層的にとらえることを目的とする。議論の軸に据えるキーワードは、「文化遺産」と「観光」である。

文化遺産、とりわけ無形文化遺産はユネスコをはじめとする国内外の取り組みによって注目を集めるようになった。個別の集団やコミュニティと結びつく多様な文化要素のなかのどれかが遺産目録に登録されるということは、もともとローカルな文脈に根づいていた文化実践が国単位のものとしてグローバルな文脈に引き上げられること、そしてそれが文化遺産という共通の範疇に組み入れられ、かつ可視化されることを意味する。とりわけ伝統染織を含む手工芸品の製作技術が無形文化遺産として認定される場合は、その技術を用いて作られる製品が市場に受け入れられるかどうか重要な意味を持つ。最終的に「売れるもの」でなければ、それを生み出す技術の継承もままならないからである。つまり、形ある製品それ自体の市場的価値が、形を持たない職人技の存続を左右するという現実もあるといえるだろう。また、遺産化とセットで進行する観光化は、商品としての販路開発と結びつくと同時に外部者からの評価を強化する。これらの動きは、アジア地域を中心とする各地の伝統染織品の生産と消費にどのような効果や影響をもたらすのだろうか。

本研究ではとくに、1) 個別の伝統染織品に対する価値づけ、2) 個別の伝統染織品が生産者および生産者を取り巻く社会において保持してきたローカルな意味、3) 伝統染織生



松井機業における、しけ絹を織るための玉糸の糸繰り作業。機械化されているものの、節の大きな部分が引っ掛かるため、つきっきりで切れた糸をつなぐ操作をしている。力織機もスピードが速すぎるものはこの糸に使用しないという。「手仕事」とは何かを改めて考えさせられた（2019年、富山県南砺市）。

産に用いられる技法や素材の選択のあり方に焦点を当てつつ、アジア地域の事例を中心に検討する。

日本人研究者ならではの布研究とは

共同研究のメンバーはいずれも、長年にわたって特定の伝統染織品生産地における定点観測的調査を実施してきたばかりでなく、製品が売買・使用される文脈にも精通している。各調査対象地域で作られ、使われている布製品は、素材、技法、用法ともに多岐に渡るが、いずれもグローバル化の急速な進展のもとでさらなる変化にさらされながらも、生産が継続している。このように特定の文化的・歴史的背景のもとに作られ、地域的特性を備えた伝統染織生産の継続（作り続けられ、使い続けられる状態）を支える要因は何であるかを追究することで、結果として可変性や再生性といった布そのものの特性も明らかにできるのではないかと考えている。

また、世界各地の伝統染織生産に影響を及ぼしてきた日本人消費者の嗜好の特質や、さまざまな形で布生産の現場と日本の市場をつないでいる仲介者の動向にも注目する予定である。こうした視点を通じて、日本人研究者が布研究に人類学的に取り組むことの意義を示したい。

これまでに実施した5回の研究会では、インド、インドネシア、ラオス、トルコ、中国、ウズベキスタン、オーストラリア、そして日本を調査対象とする各メンバーの研究報告がほぼ一巡したほか、「モノ語り」と名づけて、個別の研究者が自らの調査対象地域とのかかわりのなかで出会ってきた染織品を紹介し、生産現場に生じた変化の軌跡を具体的なモノを通じてたどる試みを行った。また、特別講師として、研究者でありかつ染め織りの実作者でもある方を招くことで、議論に奥行きを与えることを意図した。たとえば2019年度第2回の研究会は館外（石川県金沢市）で実施し、地元在住の加賀友禅作家であり、かつインドのカラムカリという伝統染色技術を対象に文化人類学的調査もしている松村恵里さんに

中谷 文美（なかたに あやみ）

岡山大学大学院社会文化科学研究科教授、グローバル・ディスカバリー・プログラムディレクター。専門は文化人類学、ジェンダー研究。著書に『女の仕事』のエスノグラフィーバリ島の布・儀礼・ジェンダー』（世界思想社 2003年）、『オランダ流ワーク・ライフ・バランス―「人生のラッシュアワー」を生き抜く人々の技法』（世界思想社 2015年）などがある。



インドネシアのティモール島での機織り。バリに拠点を置くフェアトレード団体から支給された天然染・手紡ぎ綿糸で注文の品を織っている。織り仲間のなかには色鮮やかな化学染の糸を機にかけている人も（2016年、東ヌサトゥンガラ州・中南部ティモール県）。

報告をお願いした。さらに研究会前後には、メンバーの田村うらら（金沢大学）のコーディネートによる金沢近郊のエクスカッションを自由参加の形で開催し、加賀友禅、能登上布、城端のしけ絹という異なるタイプの伝統染織の生産現場を訪れる機会を得た。

これらのエクスカッションやディスカッションを通じて改めて浮かび上がってきたのは、日本における伝統染織産業が直面するさまざまな課題であった。そこには、アジアのほかの地域との共通の問題もあれば、日本独特のものとみられる状況もある。たとえば、「着物離れ」がいわれて久しい今も、手間とコストをかけた布づくりが商品として成立するのは呉服の世界である。そこには特有の商慣行もあり、職人の工賃が安すぎてやっていけない、生活がかかっている若い人の新規参入は難しいという声を各地で聞く。また、「伝統的工艺品産業の振興に関する法律（伝産法）」に基づく伝統的工艺品の指定制度が技術・技法の継承を支える一方で、指定を受けていないからこそ自由に技法の選択ができ、新たな商品開発に結びつく場合もある。

作り手、そして使い手にとって「伝統染織」はどのような意味を持つのか。伝統の継承とは、これまでの歴史的変化のなかでどの地点にピン留めをするような作業なのか。個別の事例報告と同時にメンバーのなかで共通する参照枠組を持てるような工夫をしながら、これらの問いに答えるべく、今後の共同研究を進めたいと考えている。